白と黒のワルツ

夕凪秋香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白と黒のワルツ

【Ｎコード】
Ｎ１２８４Ｒ

【作者名】
夕凪秋香

【あらすじ】
始まりの物語から、約２０００年後のアルテミシア。そこは、魔族と色々な種族が暮らす魔法と剣の世界。
魔族の王女、ミリアは１５歳の成人の儀を行うため、契約を交わすための旅にでる。最初は楽しい旅だったが、彼女は自分の中に流れる血の運命に、惑わされていくことに……
＊更新停止中

始まり

このお話は、ある王国の王女様とその騎士のお話でございます
どこにでもあるお話ではありますが、
ありきたりな話の裏には、何か隠れている物です
今回はその裏のお話を致しましょう。

そう、黒いお姫様と白い騎士の悲しくも幸せに満ち溢れたお話を…

まずは、始まりの物語をお話いたしましょう

これは遠い世界の、本当に存在していたのか分からない世界の物語
その世界の名を、私達は『アルテミシア』と呼んでおりました。
アルテミシアには、自然が溢れ、すべてのものたちは平等に暮らしておりました
アルテミシアに存在する、動物、植物、種族全てです。
《マナ》と呼ばれる物質を使い、魔法や錬金術といった文化を生み出していき、生活を豊かにしていきました。

皆、とても幸せで満ち溢れておりました。しかし、
ある日を境に、その幸せは崩されることになりました。

アルテミシアを守護する神(アルテナ)が、別の世界から現れた魔族の長
《カルナミリア》によって、深い傷を負わされてしまったからです。

その傷は、命が危うくなるほど深く深く刻まれた物でした。

《アルテナ》はその傷によって、深い眠りについてしまったのです。

守護する神がいなくなってしまった世界に、魔族達は容赦しませんでした

残虐的なことを繰り返し、アルテミシアの地を、血と死体と悲しみの涙で溢れ返していきました。

それは、とても残酷で悲しい風景でした

アルテミシアにすんでいた者達は、祈りを捧げるしかありませんでした

「アルテナ神よ、我らをお助けください」と……

愛と慈しみの女神、アルテナはその願いを眠りにつきながら聞いていました

アルテナは、その願いを叶えるため、力の一部をある少女に託しました

その力は、魔族達からこのアルテミシアを守ることの出来る力です
少女は、幼いながらも皆を守るため、必死に魔族たちと戦いを続けました

しかし、魔族の長カルナミリアも策を練っていたのです。
カルナミリアも神と同じほどの力を持つほどの、魔神でした。そこで、同じ様に力の一部をある少年へと託したのです。
その少年は、人間に捨てられ、魔族に育てられた少年でした
彼も、家族を守るため、戦いの中へ繰り出して行ったのです

少女と少年はずっと戦い続けました。それはもう大人になっても続けられました
ですが、二人はもう少年と少女の頃の様に戦うことはありませんでした

二人は、それぞれに恋していたのです
彼女はその心を奥底に隠し、魔族たちと戦い、
彼も同じようにして、アルテミシアの者達と戦いました

ですがある戦いで、彼女と彼は剣を交えなければなりませんでした

彼女は、悲しみの涙を流しながら剣を振るい、
彼は苦しみの涙を流しながら、剣を交えていました

そんな二人の心を知らず、魔族とアルテミシアの者達は

「早くこの戦いを終わらせなければ！！」

と、二人に向かって矢を放ったのです

彼女はその光景を、彼と剣を交えながら気づいてしまいました

とっさに、味方が放った矢から守るように彼を庇ったのです
彼が驚き、動いたときにはもう遅く、彼女に矢が突き刺さりました

それはアルテミシアの者達と魔族達にとって衝撃の出来事でした

味方のリーダーが敵のリーダーを守ったのです。
敵のリーダーが味方のリーダーを守ったのです。

彼でさえも、驚き、今まで戦いの中で一度も落としたことのない剣を落としたのです

彼は冷たくなっていく彼女の体を抱きしめ、泣き続けました

彼の流した涙は、カルナミリアとアルテナ、二人にも届いていました

彼の彼女を思う気持ちを感じ、二人はこの戦いをやめることにしました

ですが、下の者達はそれでは納得しませんでした。

そこで、彼は二人の神に1つだけ提案をしたのです

「どうか、それぞれがもう争わないよう、世界を作り直してください」と

神達は考え、魔族たちが住み土地とアルテミシアの者達が住むを二つに分け

もう争わないよう、そして仲良くなれるように、《契約》という物を作りました

それは、魔族達と人が力を合わせて、ある脅威となる物を倒すためでした

二つの世界には、戦いの産物として残された脅威(モンスター)が生み出されていたのです

力におぼれた者達が、心も姿さえも変わってしまい、暴走した物です

この脅威は、消えることは無いと神は知っていたのです。醜い心は、いつしかまた新たなモンスターを生み出していったためです。

下々の者達は、この提案に皆、賛成をしました

そして、この戦いは終わりを告げたのです。

この話には、まだ少し続きがあります

生き残った、彼のことです。
彼は彼女の亡骸を静かな、そして彼女の守った世界が見える場所に横たえると、彼は彼女の後を追うように、剣を自分の体に突き刺し、息を引き取ったのです。

しかし、彼の顔は幸せそうに笑っていた……と伝えられています。

少し話が長くなってしまいましたね。

さぁ、これからが本番です

黒い王女と白い騎士のお話は、始まりの物語から約２０００年後のアルテミシアのお話です

彼らもまた、彼と彼女と同じような立場なのです

さぁ、ここから続きの物語は彼らの視点で進めていきましょうか

そのほうが、物語も楽しめる物でしょう？

アナタ様が、また私に物語を読んでほしいとおっしゃるまで

私はまた眠りにつきましょう

それでは、おやすみなさいませ

幼い時の思い出1（前書き）

ミリア過去編

幼い時の思い出１

ミリア・リズ・レイグラード。私の名前。

魔族の王の父と人間の母がつけてくれた、大切な名前。父の紅い瞳と母の黒曜石のような黒い髪を持って生まれた私は、幼い頃から膨大な魔力（マナ）を持っていた。それは、父を超えるほどだった。だから、私は父と母の代わりに、自分からモンスターと戦っていた。私が生まれる前は、父も母も民を守るためモンスターと戦っていたらしいけど、大臣に国の仕事を任せて行っていたらしくって、そのつけが回ってきたらしい。だから、代わりに大臣は私を、国を守る役目に任命した。父と母は反対したが、私はその反対を押し切ってその役目についた。

つらい戦いも多いけど、民を守ることが出来るならと我慢してきた。それに、父と母の役にたてるなら、本望だった。たとえ、民や城の人たちに忌み嫌われていようとも。

それが、私が１０歳の時の出来事。

モンスターと戦ったり、勉強をしたり、剣を習ったりの繰り返しばかりだった日々。

だけど、ある日。ある出来事が起きた。

私がいつもの様に自室で本を読んでいたとき、いきなり外が騒がしくなった。

私はモンスターが襲撃してきたのかと驚いたけど、会話の内容から

違うんだと気づくと、また本を読み始めた。すぐに本を閉じることになったけど。

いきなり侍女に手を引っ張られて、鏡の前に座らされたのだ。侍女は

「さぁ、姫様?これから忙しいので、さっさと終わらせますわよ?」

と言って髪を梳かしていく。私は何のことなのか分からず、戸惑いながら侍女のされるままになっていた。長く黒い髪は高く結い上げ、赤い薔薇飾りをつける。ドレスは胸元が少し開いた赤いドレス。首に髪と同じような薔薇のチョーカーをつけられた。侍女は私の出来に満足したのか、満面の笑みだった。私はその侍女の笑みを見て、これから何があるのか本気で気になった。でも、聞こうとする前に侍女に

「姫様、王様と王妃様がお呼びです。どうぞ、謁見の間の方へ…」

と言われた。私はその言葉にすぐ反応し、部屋の扉を開く。父と母が私を呼ぶときは、何か重要な話をする時と決まっていた。他の話は、いつも個人で呼ぶ。それに、今日は3ヶ月ぶりに会うのだ。うれしさに体が動いた。

城の長い廊下を通り、広い中庭を右に曲がってそのまま直線の廊下

を歩く。
兵士二人が守っている扉を開き、中へと入っていく。
そこにはたくさんの本に、２つの机と４つの椅子。部屋全体が赤と金色で整えられた部屋。
ここが、この国の城の謁見の間だった。
すでに、そこには父と母が座っていた。目の前には、それぞれワインの入ったグラスが置かれていた。

「お父様、お母様。遅くなってしまって申し訳ありません」

淑女のたしなみだと教えられた、礼をする。
母がにこりと笑いながら手招きをしてきた。頭にハテナマークが浮かんだけど、母に近づく。すると、いきなりぎゅっと抱きしめられた。

「やっぱりミリアは、かわいいわね。もう。」

「おっ、お母様。」

「ほら、顔が固くなってるわよ?笑顔、笑顔。」

頬を手でぷにぷにと触られる。母に久しぶりに触れられたことに、うれしさがあふれ出した。笑顔になった瞬間を見たのか、今さっきよりきつく抱きしめられた。

「――――っ。お母様、くるしっ、ぃ・・・」

「あ～、久しぶりの娘の笑顔。やっぱりかわいい！！」

そんな光景を横で見ていた父が、母の腕から私を助け出してくれた。

「……はぁっ。親馬鹿もいい加減にしろ。」

「いいじゃないの。3ヶ月も会えなかったんですよ?」

「そう言ってこの前もミリアを抱きしめて、窒息死させようとしたのは誰だ?」

「うっ、だって……」

「大体、いつもそうだ。先日だって……」

父はそう言って母に説教をし始めてしまった。父は基本母に甘いが、よく喧嘩をしたり説教をする。でも、最後には父のほうが折れてしまうのだ。俗に言う、恋人夫婦だった。

だが、今日はいつもより長い。もう私がこの部屋に来て1時間経っている。私は椅子の1つに座りながら、呆れ顔の大臣からの差し入れを食べる。大臣は男なのにお菓子を作ることやぬいぐるみを縫うことが趣味だった。

今回は、小さなパンケーキに色々な木の実のジャムをつけて食べる《ネクネ》というお菓子だった。魔族の国では、隣の人間や他の種族が住む大陸と言語が違う。たとえば、人間の方では「リンゴ」と呼ばれている物が、こちらでは「ルクゥの実」と呼ばれているのだ。

私は、向こうの大陸の言語も覚えることが出来たから人間の人と会話できるが、こちらのほとんどの人は覚えようとしない限り、人間とは会話できない。それが常識だ。

母と父の痴話喧嘩は、ちょうど私がネクネを全て食べ終わったときに終わりを告げた。

「…王様、お客様がいらっしゃいました」

大臣が窓の外を見ながら言った言葉に、父はピタリと言葉を止めた。母も真剣な顔に戻り、今さっきまでの母の顔としてではなく、国の王妃の顔になった。

「ようやく来たか。どれほど待ちわびたか」

「来てしまったのね……面倒なことになりそうだわ」

父は満面の笑みになるし、母はものすごく険しい顔になってしまって、私はその状況を飲み込めずにいた。大臣に「誰が来るの？」と聞いても大臣は答えてはくれなかった。

数分後、謁見の間の扉が突然開かれた。

扉を開けたのは、母と同じ黒の髪と瞳を持った少年だった。年齢は私よりも低そうで、服装は全て白。本の中で読んだ「王子様」みたいな格好だった。腰には剣をつけていたし、とてもかっこいいと思ったから。興味は無かったけど。その少年は、息が切れて少し疲れた様子だったが、隣の父と母を見てこっちに走ってきた。そして、勢いよく父の顔にとび蹴りを入れた。すぐに反応が出来なかったのか、父はもろに顔に喰らった。

そして、その少年は満足げな顔で母に抱きついた。私は、父が心配になり様子を確認する。

父は怒りが顔に漏れていたが、すぐに元の顔に戻って少年を睨んでいた。そんな父を無視して少年と母は会話を進める。

「お久しぶりです、姉上！」

「えぇ、久しぶりね。カレル。元気だった？」

「はい！姉上こそ元気でしたか？」

「それはもう、元気すぎたくらいよ」

母は優しげな笑顔でその少年――私の従弟を抱きしめ返したが、すぐに怒った顔で頭を叩いた。

スパーンッと、いい音が部屋に響き渡った。

「いっ、たぁい！！あ、姉上いきなり何を？！」

「カレル、挨拶もなしにいきなり人様に蹴りを入れるんじゃありません」

「うぅ、だって……」

「そういう時はね、挨拶をしてから蹴りを入れるんですよ？」

「おい、何を教えているっ」

「それか、挨拶をしてから手刀を首に……」

「王妃様、そんなことを教えてはいけませんっ！いいですか……」

母について伝えていないことが何点か忘れていた。

ひとつ、母は人間の王族の娘だった。

ふたつ、母は武芸を父親つまり私の祖父に仕込まれている。みっつ、そして母は唯一、父を倒すことができた人である。

つまり、この国最強の女性なのだ。

従弟のカレルに、「姉上」と呼ばせているのは……。昔のトラウマが甦りそうだから、言わないでおきます。

母達の会話についていけない私は、部屋の端にある窓に腰をかけた。そこからは、城の門と城下町が見えた。そこに行くまでに、小さなハープを見つけた私はゆっくりと弾き始めた。母達は会話に集中していて、聞こえている様子は無かった。だから私は小さな声で音と合わせて歌い始めた。

私は小さい頃から音楽が好きだった。楽器を弾くことも好きだったし、もちろん歌を歌うことも好きだ。時々、自室で歌うことが私の唯一の楽しみだった。

目を閉じていたためすぐには気づかなかったが、隣に誰かが座ったのが分かった。母達の声が聞こえなくなっていたから、その誰かだろうと思い、気にせず歌った。

一通り歌い終わり、目を開けると目の前には見知らぬ人が座っていた。

カレルと同じような服を着ていたが、髪は雪のように白に近い白銀で、長く、瞳はとても青かった。私よりも大人ぽくて、とても綺麗だった。

「……終わりですか？」

やさしげな声と笑顔に一瞬で心を奪われた。少しだけ顔が熱くなるのが分かったけど、いつも通りの私に戻す。

「はっ、はい。あの…失礼かもしれませんが…」

「あぁ、今回が初めてですね」

そういいながら、彼は白い手袋を右手だけ外し、私の前に伸ばす。
そして笑顔で

「初めまして。エイレーン王国第二王子、カミル・ラグド・エイレーンです」

それが、彼との出会いだった。
それは、私が１２歳の誕生日を明日に控えた日だった。

幼い時の思い出1（後書き）

エイレーン王国は、人間の国のひとつです。
魔族の国とよく交流を交わし、契約を交わす場合が多いです。
契約はどちらかが死ぬまで消えませんから、結婚に近いものです。
ミリアの母親はこのエイレーン国出身です。父親との出会いは、また今度書きます。

幼い時の思い出2

彼は私より2つ年上の、国と国との交流生だった。カレルの父――私の伯父が提案したことらしい。伯父はエイレーン王国の仮の王だった。実際は本物の王がいるのだが、病弱なため政治は伯父に任せきりらしい。彼はその本物の王の子供らしい。カレルは案内役として、この国を訪れ、彼は身分を隠して交流生として参加していた。交流期間は3ヶ月。私は、こちらでの交流生の担当になった。

「それでは、頼むぞ。ミリア」

「…お受けいたしました。国王様」

「ミリア。早速、この国を案内してきなさい」

「分かりました、王妃様。少し準備をしてから出発をします」

最後に礼をして、カレルやカミル、他の交流生と共に外へと向かう。扉を開けて外に出る瞬間、カレルに手を握られる。

「どうしたの?カレル」

「…僕はすぐに国に帰ります。だから挨拶を、と思って」

「また来ます」と言って私の手に口付けをして、国からつれてきた兵士と共に国へ帰っていった。私より年下なのに、大人のような行動をするカレルに呆気を取られたが、すぐに感情を切り替える。

「さて、まずは自己紹介を致しましょう。私はミリア・リズ・レイ

グラード。この国の王女であり、この国の第1近衛騎士隊隊長です。3ヶ月間、あなた方の警備と稽古の担当を致します。どうか、よろしくお願いします。」

30人程度いる交流生の半分は貴族の息子や娘だった。だが、誰もがこの国に興味があり、そして武芸に長けていた。数人の兵士を連れて行くだけですむのは、隊長としては安心する。

「今日のスケジュールは皆さん長旅で疲れていると思いますので、城下町を案内した後、これから3ヶ月泊まることになる、宿へ案内を致します。」

その言葉に、交流生は嬉しさからなのか声を少し上げた。それもそうだ。隣の大陸とはいえ、こちらに来るには1ヶ月も船旅をしなければならないのだ。さすがに鍛えているとはいえ体に疲れは残っているだろう。今日は早めに宿に行くことにしよう。

「さて…この中で馬に乗れる方は何人いらっしゃいますか?」

そういうと、手を上げたのはわずかに10人程度だった。その中には、彼も入っていた。武芸に長けているとはいえ馬に乗れる方はあまりいなかったのだ。そうだろうと思って代わりの物を用意していると父は言っていた。

「わかりました。手を上げた方は私についてきてください。残りの方は、この兵士についていってください。」

そういって、横に控えていた兵士を紹介する。鉄の甲冑を身に着けた、まだ20になったばかりの青年だ。赤い髪に赤い瞳を持ち、胸元にはわが隊の証の紋章をつけている。側には彼と契約を交わした、

女性が控えている。

「彼は、ケイト・メリダイン。私の隊の副隊長を務めている方です。彼が案内を致します。」

「ご紹介を受けました、ケイト・メリダインと申します。少しだけですが、案内を承りました。馬に乗れない方は、私が案内を致します。」

そういって、ケイトは他の２０人を連れて門の外へと向かった。彼とは後で宿の前で合流する予定だ。近くにいた兵士の一人が「これを」と言って渡してきた、愛用の黒いマントをドレスの上から羽織り、残った１０人を馬屋へ案内した。

「どの馬でも、ご自由にお使いください。」

そういって、馬屋の扉を開く。そこには１００頭ほどの馬が住んでいた。赤馬や黒馬、珍しい
白馬もそろっている。私は、クロリアを呼ぶ。クロリアは馬ではない。モンスターとして知られている、鳥の頭にライオンの体を持ち、背中には大きな翼を持つ《グリフォン》だ。
人間には反対をされることが多いが、こちらではよくあることだ。
モンスターを調教して、ペットとして飼うのは。交流生がそれぞれ

気に入った馬を連れて、集合場所の門の前に戻ると全員クロリアを見て驚きの顔をしていた。だが、その顔はすぐに興味の顔になった。

「うわ～、本当にいるんだ。モンスターをペットとして飼う人って」

「ねぇねぇ、触ってみてもいいですか？」

「えぇ、いいですよ。やさしくしてあげてくださいね？」

「うわっ！毛が以外にふわふわしてる。」

「ほんと？！私も触る！！」

「俺も、俺も！」

すぐに、クロリアは人気者になった。クロリアは、まんざらでもなさそうだ。

しばらく時間が掛かりそうだったから、遠くに離れて門の柱に体を預けて様子を見る。皆楽しそうだった。様子を見ていると、彼が私に気づいてこちらに向かってきた。

「あれは、貴女が飼っているのですか？」

「カミル様……。えぇ、私が小さい頃から」

「今は私は王子ではありません。ただの交流生です。カミルと呼んで下さい」

「しかし…」

「それに、そのほうが気が楽ですから」

笑顔で言ってくるから、少し心の中がドキッとした。でも、顔には出さない。そう、教育されたから。

「じゃあ、カミルさんでよろしいでしょうか？」

「えぇ、それでお願いします。さすがに身分がばれると困りますから」

「分かりました。では、カミルさん。貴方は行かなくていいんですか？」

そういって、クロリアの周りの集団を指差す。彼は、あまり興味がなさそうな顔をして私を見た。

「人が多い所は苦手なんです。元々、そんなに人と触れ合いませんから」

「そう、なんですか。でも、それじゃあ何で私のところに？」

「こちらを見ながら微笑んでいる姿を、近くで見てみたいと思って」

クスクスと彼は笑っていたが、私は心臓が痛かった。顔も熱くなっていたから、たぶん赤くなっていたんだろう。

「ごめんなさい。少しからかいました。」

「いっ、いえ。別にかまいません。私も暇だったものですから、お話できてよかったです」

「失礼しますね」そう言って、私はクロリアの周りの集団へと向かった。

「それでは、皆さん。もうそろそろ城下町を案内致します。それぞれ、選んだ馬のほうへ乗り、私についてきて下さい」

はーいと返事をして、残念そうな顔でそれぞれ馬に乗っていく。私もそれを確認して、クロリアの背に乗る。背中を撫でながら、

「久しぶりに遊んでもらえて、楽しかった？」

と聞く。すると、ピュイッと言う、うれしそう声が返ってきた。

「それは、よかった……。さぁ、皆さん！ちゃんとついてきて下さいね」

元気な返事が返ってきたのを確認して、私達は城下町へと繰り出していった。

城下町を一通り案内し、宿に到着する頃にはもう外は闇で染まっていた。

「……では、おやすみなさい。また、明日お会いしましょう」

宿での説明を一通り済ませ、皆に挨拶をする。
説明が終わると、それぞれ部屋に戻って眠る人が多かった。私は、近くにあった椅子へ倒れこむように座った。

「ふぅ、疲れた……」

「お疲れ様です。姫様」

そう言ってケイトが、グラスにルクゥの実を湯で溶かした「ルクゥ茶」を出してくれた。
「ありがとう」と言って、そのグラスに口をつける。かすかな甘みが疲れた体に染みる。

「姫様もそれを飲んだら、部屋でお休みください。明日は実力を試す試合があるのですから」

「うん、分かってる」

私は、残っていたルクゥ茶を一息に飲み、ケイトにおやすみの挨拶をする。そして、自分が泊まる予定の部屋へと向かう。明日は、練習試合なのだ。私対交流生全員の。３０人も相手をする。それに、男性との体格差もあるし、年齢という体力の差もある。明日１２歳になるが、性別の違いもあるし、たとえマナが強くても負けるかもしれない。体力を回復しておかなければ。
宿の食堂から二階に上り、一番端の部屋を目指す。そこが私の部屋だ。だが、その部屋の前の廊下に誰かが、外を見つめながら立っていた。昼間と違い、軽装になった彼だった。

「カミルさん」

声をかけると気づいてくれたのか、彼はすぐにこちらを向いた。髪を結んでいないせいか、月の光のせいか分からないが、女性と見間違えてしまった。それほど、綺麗だったから。

「あぁ、そういえば隣の部屋でしたね。これから寝るのですか？」

「えぇ、明日も早いですし。それ以外にも色々と……」

そう。試合が終わった後は、交流生をケイトに任せ、私は夜の誕生日パーティの準備をしなければならないのだ。国の偉い方々も参加するので、絶対に参加しなさいと母に灸を据えられたのだ。本当は、参加したくないが。

「確か、貴女の誕生日パーティがあるんですよね。私も参加しますよ」

「えっ、参加するのですか？」

「えぇ、父から参加しておくようにと言われましたから。本当は参加したくないんですが」

「カミルさんも、参加したくないんですね」

「人の多いところが嫌いですから。…ん？カミルさんも、ということは貴女も参加したくないんですか？」

「はい……あんまり目立ちたくないので」

そういうと、彼は突然笑い始めた。何がおかしいのか分からなかったが、彼はツボにはまったらしい。

「ははははっ、噂と全然違う方ですね。こちらの方が全然いい」

「噂…ですか」

「噂では、『彼女には感情が無く、まるで機械人形のようだ』と言われているんですよ」

悪い噂ならそこそこ聞いていたが、彼から聞いた噂は今まで聞いた事が無かった。また、新たに増えた噂なのだろう。
私は、普段感情を表に出さない。出すとしても、それは両親の前か親しい人の前でしか感情を出さないようにしていた。幼い頃から、大臣にそう教育されたのだ。
機械人形と言われてもおかしくはない。

「言われてもおかしくはありません。そう教育されましたから」

「でも、貴女は昼間、微笑んでいましたよね？」

そういえば、そうだった。あのほのぼのとした空気に感情が現れてしまったのだろう。
いつもと違った自分に驚きが隠せない。

「確かに…あの時は…」

「それに、ものすごく照れてましたよね。あの時はかわいかったですよ」

そう言われて、顔が熱くなるのを感じた。こんなに他人に感情を見せるなんて、今までありえなかった。彼は、それに気づいていなかったからよかった物の、すぐに顔を元に戻す。

「……あまりからかわないで下さい」

「怒ったのなら、ごめんなさい。明日も早いですから、今日はこのぐらいにしましょうか」

そういって彼は、私の手を取り口付けをする。驚いて、すぐに身を引く。彼は苦笑いをしながら、自分の部屋に戻っていった。私は、彼が部屋の扉を閉めるまでその場に固まっていた。そして、部屋に勢いよく入るとすぐに扉を閉め、ベットに飛び込む。彼が口付けた場所がまだ熱い。頭が破裂しそうだった。

「……あれは卑怯です」

そう言って、身に着けていた物全てを外し、髪も下ろして下着の姿でベットに入る。

私は、いまだにこの感情が分からなかった。この国の本にも載っていなかった、この感情をなんと言うのか、分からなかった。でも、幸せな気分になれた。戦いと家族しかなかった彼女にとって、彼の存在は1日で大きなものとなっていた。

「明日が、楽しみです」

そうつぶやいて、私は目を閉じた。

だが、その日は訪れなかった。
交流生の住むエイレーン王国で、内乱が起きたのだ。急遽、彼らは2日目で帰ることとなった。誕生日パーティも行われることは無かった。
交流生を見送ったその夜、モンスターが攻め込んできたのだ。
パーティの準備をしていたミリアは、戦いに出なければならなかった。街を守り終えたのは、もう朝日が昇り終わった頃だった。

それから2年ぐらいの月日がたったある日。ミリアは父達が残していた、仕事をしている時、その知らせを受けた。
それは、国と国の会議に参加していた父と母が、反乱を起こしたエイレーン国の民に殺されたという事と、彼、カミル・ラグド・エイレーンも彼の家族共々、同じ場所で殺された、という知らせだった。
伯父達も殺されたが、カレルだけ行方不明らしい。

彼女はその日、一番大切だった家族と親戚と、初めて好きになった人を同時に失った。
彼女は、初めて多くの人の前で泣いた。そして、大切なものを奪った人間を憎み、彼女は完全に心を閉ざした。

たとえ、大切だと思うものが無くなったとしても、彼女は王女なのだ
国をこれから一人で支えていかなければならない
だから、いらないものは捨てた
感情を、捨てた

それは、ミリアが１４歳の誕生日を迎えた日だった

幼い時の思い出2（後書き）

これで過去編は終了です。
それぞれのキャラの過去編は、物語後半で執筆しようかなと思います。
これからが本編ですｗ
長くて、ごめんなさいｏｒｚ
本当はこんなにダークにする予定は……無かったんです。はい。
本編は、明るく元気にしていこうと思います。

木箱の中の思い出

あの出来事から４ヶ月が過ぎた。ミリアはあの時以来、感情を失くした様に戦いと執務におわれていた。兵士や親しかった大臣によく笑いかけていた彼女は、次の日から無表情で行動するようになっていた。それは、まるで人形のようで何かを頼めばやるが、何も頼まなければやらない、という状況になっていた。ミリアの瞳からは今までのような明るさが消え、無機質な光を映していた。

大臣たちも最初はそっとしておこうと考えていたが、もうすぐ１５歳の成人の儀を行わなくてはいけない。それには、彼女の意思が必要だった。それに、人間全てを憎むのは筋違いだと考えていたのだ。だから、必死に仕事の合間に説得をするが、彼女からは何も反応がない。

すっかり困り果てていた。

大臣は執務室でミリアの出来ない国の仕事をこなしながら、独り言をつぶやいた。

「１５の成人の儀を行うためには、契約を交わしておかなくてはいけないと言うのに……。王と王妃様を失った悲しみは私たちにも分かる。人間を憎むのも分かる。だが、全ての人間を憎むのは違う。間違っているのに……」

現にエイレーン国の民達が反乱を起こした時、交流生としてこちらに来ていた生徒達は、必死になってミリアの父と母を守ろうと民達に説得をしていたらしい。それに、民達が何故急に反乱を起こしたのか、理由が分からなかった。エイレーン国は、人間達の国の中では、一番平和な国だったのに。

民達はその問いには答えず、王宮へと攻め込み、会議を行っていたエイレーン国の王と臣下達、そして第２王子とこの国の王と王妃を殺したのだ。
誰かが裏で操っているとしか思えなかった。

「それを解決するのは後でもできる。だが、姫様の誕生日まで後８ヶ月……。早く誰かと契約をしてこの国を守ってくださらなければ…」

何故、契約が国を守ることになるのか。
それは、契約がこの国では大人という証なのだ。人間の国や他の種族とは考え方が違う。
魔族は平均寿命が１００～３００歳まで生きる。長いものでは１００年を生きた者もいた。人間とは寿命が違いすぎるのだ。まして、ミリアはその魔族と人間の間に生まれた子。マナの力が強かったから今までひどい仕打ちを受けることは無かったが、弱かった場合、たとえ王族の娘であっても、成人の儀を行ったとしても、この国の上に立つことは許されない。
この国では実質、マナの力が強いものほど立場が上なのだ。
ミリアは、この国で一番マナの強かった父と母よりも上だったからよかったが、まだ幼い少女なのだ。今のままでは彼女を守れる範囲が狭い。彼女は、小さい時から多くの者達に憎まれ、非難されているのだ。ミリアはそんな事は知らない。もし、１５歳の成人の儀が行えなかった場合、彼女の代わりの者が王として君臨することになるだろう。そして、彼女はただの『兵器』として扱われるか、もしくはその場で死を迎えるかだ…
この国の魔族の民達によって。

大臣はミリアの生まれたときから彼女の傍に居た。
いや、正確には王妃に仕えていたため、王妃がいない時にミリアの

世話をしていたのだ。
小さい頃から彼女を知っているから、大臣はミリアのことを我が子の様に思っているのだ。
彼女が笑う時には一緒に笑い、涙を流すときはそっと慰めてあげた。
彼女を死なせないためにも、早く契約をしてもらわねば……
だが、契約はそれぞれの意思がなければできない。どちらかが死ぬまでその契約は消えることは無いのだ。無理に契約をすれば、神が裁きを下すのだ。死という裁きを。
そうやって殺された者が、この歴史上に何万人もいるのだろう。

「どうにかして、姫様の心を元に戻さなくては…」

その時、執務室のドアが2回ノックされた。突然のことで少し驚いたが、すぐ平静を取り戻す。

「誰だ」

「ケイト・メリダインです。つい先ほど、大臣へ、と荷物が送られてきました」

「荷物？…入れ」

「失礼します」

ケイトが執務室の扉を開く。彼の手元には、木で作られた大きな箱を抱えていた。
ケイトはそれを大臣の傍にあった机の上にその木箱を置く。
大臣は椅子から立ち上がり、その中身を確認し、その顔が驚愕の顔となった。

「……こちらに来ていた交流生から送られてきた物です。反乱軍の目を盗んで、これを送ってくるのは至難の業だったでしょう。港で荷物検査を行っているはずですから。これと一緒に、封筒が2通送られてきました」

「…手紙？誰宛だ」

「片方は大臣に。片方は、姫様にだそうです」

そう言って、ケイトは箱と一緒に持ってきていた2通の封筒を大臣に渡す。そして、礼をして執務室を退室した。

大臣は、彼に見向きもせず手渡された2通の封筒をじっと見つめていた。

彼はおもむろに、自分宛に送られてきた封筒の封を切る。中の手紙を抜き、目を通す。そして、彼は手紙を自分の机に置き、送られてきた荷物ともうひとつの手紙を持って執務室を出た。ある場所へ向かうために。

大臣が向かった場所は、城の傍にある小さな庭園だった。色々な花が咲き、草木が青々と茂っている場所だった。彼は庭園の中央にある小さなテラスへと向かう。そして、彼女を見つけた。黒曜石のような髪を風にたなびかせ、赤いドレスではなく、喪服の様な黒いドレスを着た彼女は、そこに立っていた。

――それは、ミリアだった。ミリアは王達が死んでから、一度も赤や他の色のドレスは着ず、黒いドレスを着ていた。まだ、悲しみが抜けきらないためだろう。
大臣は彼女の足元に木箱を置き、封筒を彼女に渡す。

「……姫様。手紙が送られてまいりました」

ミリアは振り返り、無表情でそれを受け取り封を切って手紙を読む。
だが、最後の行に目を通したミリアは、それまで無表情だった顔を驚きの顔に変えた。
そして、４ヶ月ぶりに声を出した。

「…どう、して…。なんで…？」

「姫様…」

ミリアは、手紙を手から落とし膝も落ちた。顔は驚いたまま、木箱の中身を見ていた。
木箱の中に入っていたのは、レイピアの様な、この国に古くから伝わる宝剣と使い込まれて少しボロボロな青い宝石のついた杖。そして、表面に少しだけ血がついている大きな赤い宝石のついたネックレス。
それは、父と母が持っていた物だった。
ミリアは、震える手をネックレスへと伸ばし、それを掴む。自分の胸元まで持ってきてそれを見つめる。

「…どうして？…一日しか、会ってなかったのに…」

「彼らは、姫様にお礼がしたかったそうです。一日だけだったけど、普段の生活を忘れてありのままの自分に戻れた、と書いてありまし

たよ」

「……っ、何も…してない…のに、ただ、頼まれただけだったのに……」

「私の方の手紙には、他にも書かれていました。頼まれたから、というのは皆さん分かっていました。でも、姫様が城下町を案内された方々は、あなたがどれだけこの国を愛しているのか、王様達のことが大好きなのか、そして……どれだけ『民』の事が好きなのか、姫様の表情や言葉。行動の一つ一つで分かったそうです。…だから、そんな姫様のために、必死に王様達を守ろうとした」

「……っ！」

「だけど、守ることが出来なかった。人数が圧倒的に足りなかった。彼らの知り合いや家族の助けを借りても、守ることが出来なかった。出来たのは、反乱軍から遺品を奪い取り、ここに届けることだけ。……手紙の最後にはこうも書いてありました。」

「……」

「『ごめんなさい。ミリアさんの大切な人を守ることが出来ませんでした。どうか、あの人達の遺言をミリアさんに伝えてください。これが、私達にできる最後のお礼です』」

「…あの人達の…遺言…？」

大臣は、少し言葉を出すのを止め、一つ息を入れて、手紙に書かれていたことを言った。

その言葉に、ミリアは目を見開き、その瞳から涙を流した。

「『ミリア、人間を憎まないで。幸せになって。』」

それは、暖かくてやさしい愛をくれた母からの言葉

「『私達がいなくなったとしても、決して泣くなよ』」

それは、厳しくてもやさしさに溢れていた父からの言葉

「『あなたの歌とハープ、もう一度、聴きたかったな』」

それは、新しい感情を教えてくれた、新しい幸せをくれたあの人の言葉

「…っ！…ぅぁ…ぁあ、あああああああああああああああああああああああああ…っ！！」

彼女は泣き続けた。ただ、感情に身をまかせ、涙を流し続けた。４ヶ月間、塞き止めていた悲しみが涙となって流れていた。大切な人を3人も失った悲しみは、幼い彼女には重すぎたのだ。手の中にあるネックレスを握り締めながら、彼女は泣いた。

大臣は、そんな彼女の小さな体を抱きしめ、自分もまた一筋の涙を流した。

彼女が泣き止むまで、大臣はずっと彼女を抱きしめ続けた。

木箱の中の思い出（後書き）

大臣視点から書いてみました。
＊少し裏話
実は、手紙の話のところで、従弟のカレルの話題を書こうと最初計画していました。でも、執筆中に「あれ、これ親達のほうがしっくりくる…」というわけで、急遽変更しましたw

決意

どのくらい泣いていたのだろう。
ミリアは、涙で赤くなった目を擦りながら大臣の顔を見る。大臣は穏やかな笑顔で、涙でぐしゃぐしゃになっていた顔をハンカチで拭ってくれた。

「…落ち着きましたか？」

「…うん…ありがとう」

「どういたしまして」

大臣はミリアから腕を放し、彼女を立ち上がらせた。そして、ドレスについていた草を払う。
ミリアは手に握っていた赤い宝石のネックレスを見つめていた。
そして、彼女は決意した。

「…私、契約の相手を、探します…。そして、お父様とお母様の国を守りたい…っ！」

「ようやく、ですね」

「遅くなって、ごめんなさい。もう、この話をして４年も経つのに、私は契約に戸惑いを感じていたんです。なんで、魔族は必ず他の種族と契約を交わさなくてはいけないのか。なんで、異性としか契約をする事が出来ないのか。……魔族同士では、子孫を残すことが出来ないと知っていても、納得が出来なかった。どうして同姓同士で

は駄目なのか。信頼している相手とでは契約を結べないのか……小さい頃からの疑問が解決しないから、私は迷っていた」

「……」

「でも、もうそんなことも言っていられない。前を…向かなくてはいけないのですよね？」

「はい」

「……人間は、まだ嫌いです。だけど、彼らのおかげで私は立ち直ることが出来た。彼らのおかげで私は大切なことを思い出せた。だから…」

ミリアは、持っていたネックレスを首にかける。いつの間にか、本来の光を取り戻した赤い宝石のネックレスをつけた彼女の目は、宝石と同じように強い光を取り戻していた。
そして、彼女は信頼する大臣に宣言した。

「私も、彼らに恩返しをしなければなりません。契約が済んだら、彼らの国を共に復興させる事を、私は、神に誓います。たとえ何年、何十年が掛かろうとも、必ず成し遂げて見せます」

「…その誓い、私もお手伝いいたします」

「当然、そのつもりです。あなたは、大切な私の、家臣なのですから」

そう言って、彼女は微笑んだ。
４ヶ月ぶりの笑顔だった。

大臣は、その表情を見て、自分も微笑を浮かべ深く礼をする。彼女に笑顔が戻った。
二人は、庭園のテラスを出てそれぞれの仕事へと戻った。
大臣はいつもと同じ、国の仕事。
ミリアは契約の相手を探すための、旅支度。
どちらも、同じぐらい大切で重要な仕事だった。

翌日、ミリアは大臣に国を任せ、部下二人にクロリアを連れ、隣の大陸へと向かった。
連れてきたのは、ケイト・メリダインと彼の契約者、ネリネ・メロディア。
彼女達は、普段とは違う服装だった。
ミリアは、愛用の黒いマントの下に動きやすい茶色の服装。ケイトとネリネは、同じベージュのマントに、軽い鎧。それぞれ、腰に剣をつけていた。
ミリアも父が持っていた、宝剣を腰に、母の杖を白い布で巻いて背中に、そして赤い宝石のネックレスを胸元に。
彼女達は、クロリアの背に乗り、隣の大陸を目指す。

ミリアの、契約者を探す旅。

彼女は、自分の血と運命が、この世界全てのもの達の運命にかかわ

っていくことも知らず、
ただ、初めて行く彼の故郷、元エイレーン王国へと希望と期待を募らせていった。

決意（後書き）

今回は短いです
正直言うと……この後の話がものすごくギャグに走りますw
ミリア、キャラ崩壊しますw
最後はシリアスになる予定ですが、次のお話あたりからギャグの予定ですw

初めての土地

「よっと、……ここが……」

国を出て、3週間。クロリアに乗って、途中、休みながら飛んだ3週間。

ようやく、ミリアとケイト、ネリネは隣の大陸「ガジェット」へと辿り着いた。

さすがに、モンスターのクロリアを見られると襲い掛かってくる者達がいる。仕方なく、下の森の中へと降りる。降り立つと、ミリアは、キョロキョロと回りを興味津々な目で見ていた。

ミリアは、今まで国から出たことが無かったのだ。出たとしても、それは街を守るためで、長くその街に留まることが、無かった。ゆっくりする暇が無かったのだ。

それに、本では読んでいたが、初めての魔族以外が住んでいる土地に来たため、はたから見ると挙動不審だった。

そんな光景を見ていたケイトとネリネは、ミリアの子供らしい姿に笑顔がこぼれた。

実は、ケイトとネリネとミリアは兄妹、姉妹として育ったのだ。身分は違うが、3人は小さい頃から一緒だった。どんな時でも。だから、ミリアはこの二人を連れてきたのだ。

「姫様、まだここはエイレーン王国ではありません。急がないと日が暮れてしまいます」

今の時刻は、日がもう真上にくる時間だ。ここから元エイレーン王国へ向かうとなると、だいたい徒歩で行くと、7時間は掛かる。そうなっては日が暮れて、街の門が閉められてしまう。夜になると、

活発に活動するモンスター対策なのだ。

「そ、そうだね。じゃあ急ごう」

すぐに走り出そうとするミリアの肩を、ガシリとネリネが掴む。

「その前に、これからの立場について言っておくことがあります」

「うん。昨日も言ったね」

「はい、これはとても大事なことですから」

命にかかわるぐらい、大事なこと

「まず、姫様はこれから私達の「子供」という立場になります。そのほうが、これからの行動が楽になります。そのため、失礼ではありますが、敬語はなしとなります。姫様の事も名前で呼ばせていただきます。」

「それは、全然かまわないわ」

「後、姫様が魔族だということも隠しておいて下さい。魔族の証のその角もフードで隠しておいて下さい。危険ですから」

「でも、私の角は小さいし、黒いから髪と混じって分からないと思う」

魔族には、魔族の証としてそれぞれに合った角が生えてくるのだ。

ミリアは黒い小さな角が頭に生えていた。今は、髪に混じって見えていない。

ケイトとネリネは、魔族ではなく、人間のため角は無い。

「駄目です。必ず隠しておいてください。最悪の場合がありますから」

「…分かりました」

最悪の場合、魔族は観賞用として奴隷のように飼われるか、その場で殺される。
そのことを本で知っていたミリアは、すぐにマントに付いていたフードを被る。
すっぽりと、顔の上半分が相手から見えづらくなった。

「それで大丈夫です。外れない限り、ばれる事は無いでしょう。」

「うん」

「おーい、ネリー。こいつはどうするんだ?」

そう言ったケイトが指さしていたのは、近くに飛んでいた蝶を追いかけているクロリアだった。ネリネは少しため息を付いた。

「そうでした。完全に存在を忘れていました」

「あははは……クロリア、おいで」

ミリアの声に反応して、今まで蝶に夢中だったクロリアは

「げふっ」

「えっ」

「あっ」

何も反応できなかったケイトを突き飛ばし、ミリアの前にシュタッと座る。突き飛ばされたケイトは綺麗な弧を描いて、木に顔面からぶつかり、地に伏せた。

「ケイト！」

困惑した顔で、すぐにネリネはケイトに駆け寄る。ケイトの体を激しく揺すりながら何か言っているが、遠くてミリアには聞こえなかった。

ミリアは、今のうちにクロリアをどうしようか、と考えた。

見つかると、最悪私達のこともばれてしまう。だけど、向こうに早く帰るためには、クロリアは不可欠な存在。

ミリアはしばらく考え、思いついた。

「…伝言係にしよう」

それなら、まだ安心は出来る。

定期的にクロリアを呼び、向こうの大臣に近況を報告する。そして、向こうの大臣が国のことを報告する。クロリアでも、往復で1ヶ月は掛かる。これなら、ほぼバレル事は無いだろう。

たぶん。

「そうと決まれば、クロリア、伝言頼まれてくれる？」

すると、クロリアはピュイッと一鳴きした。了承してくれたようだ。

「大臣に、無事に着いたと伝えて。そして、大臣に国で変わった事はなかったか聞いて来て」

クロリアは、すぐに背の翼を開き、空高く舞い上がった。一度、ミリアの上をくるりと回り、そのまま遠くの空に消えていった。

「……っと」

ミリアは自分の荷物が入ったバッグを腰につけ、木の根に腰掛ける。そして、ネリネがケイトを連れて来るまでずっと空を見ていた。

「さて、と。それじゃあ、行くか」

「貴方が早く起きないから、時間ぎりぎりになりそうね」

「誰のせいだよ！もう意識はあったのに勝手に死んだと思い込んで、心臓マッサージ始めた所為で、反対に死に掛けたぞ！？」

「しょうがないじゃない。気づかなかったんだもの」

「だからって……その後、面倒になって腹に向かって踵落としする

ことないだろ!?それで完全に意識失ったんだからな??」

「貴方なら、平気だと思ったんだけど……やっぱり駄目だったかしら」

「誰でも平気じゃないからっ…頼むからまともに治療してくれ…」

「あっ、あの、二人共」

「はぁ……もうグダグダ言わず、行くか」

「えぇ、行きましょう」

「まっ、待って」

「後、何時間だ?門閉まるの」

「大体、5時間後ね。急いでいけば、間に合うわ」

「ねぇ……」

完全に無視されているミリア。二人きりの世界に入ってしまったケイトとネリネ。

さっさと先を歩く二人に対して、今さっきから完全に無視されてはいるが、必死について行っているミリア。

傍から見れば、子供のことを無視している親達だった。

「……」

普段は、ケイトとネリネが二人っきりの世界に入るのを完全に無視

していたミリアだったが、歩き始めた時から感じている、不穏な空気が気になって仕方がない。二人にその事を伝えようにも、耳を貸さないようだった。
ミリアは、思わずその場に足を止め、二人の後ろ姿を見ていた。

「だから……」

「分かったから……」

二人の話し声が遠くになっていくにつれ、その姿も遠くなっていく。
ミリアはボソリとつぶやいた。

「昔からそうだったね……二人の世界に…私は存在してないんだね……」

そう言って、ミリアは二人と離れ、不穏な空気の元を探し始めた。
森の中にあった街道からはずれ、ミリアは森の奥へ奥へと入っていった。

そして、それらしきものを発見した。

それは、赤い血の跡だった。それも、まだ生温かい血。

血の跡は、まだ森の奥へと続いていた。

ミリアは、胸騒ぎを押さえつけながら、また森の奥へと入っていった。

初めての土地（後書き）

次のお話について
Ｒ－１５Ｇの表現があります。注意してください
そして、新キャラ登場しますｗ

再会

ミリアが見つけた血の跡は、点々と色々な場所についていた。
地面に落ちていたり、木にベットリとついていたり、草の葉に少しだけついていたり。
いろいろな場所についていたおかげで、どこまで続いているのか分からない。
でも、どの血も触ると生暖かかった。
それは、まだこの血がついて時間が経っていないことを示す。

「……急ごう」

ミリアは、血の跡を追っていく。だが、その時突然空が暗くなり、雨が降り始めた。

「血が消えてしまう」

血が消えてしまう前に、これが誰の血なのか見つけなければ……
もし、人間の血だったらモンスターに襲われている可能性が高い。
そして、そのモンスターとその配下がうろついている可能性がある。
もし、街や村を襲うつもりなら

「殺す」

ミリアは、周囲を気にしながら気配を探る。モンスターがいないか、人がいないか。
そして、見つけた。人のたくさんいる気配を。それは、すぐ近くだ

った。
ミリアのいる場所からすぐに見えた。木や草が生えていない平地に、短剣を持った野盗の男達に囲まれた男性と女性が剣を持って対峙しているのが。
モンスターではなかったが、これは危ない状況だった。
野盗の男達は見ても１０人はいた。そして、武器も持っている。対して、男性と女性は二人だけ。さらに、男性のほうは左腕から血を流していた。
今まで追って来た血は、彼のものだったのだ。
ミリアは、木に隠れながら彼らの様子を見ていた。

「……面倒な状況ね……」

助けに入ったとしても、彼らを守って戦えるか分からない。人数が多すぎる。
もし、助けに行ったとしてもどちらかが野盗に捕まるか、殺される。
このまま見捨てたほうがいいのだろうかと彼らを見るだが、その考えは一瞬にして消え去る。

左腕に傷を負った男性に見覚えがあったのだ。
髪は黒く、その瞳も同じように黒い。そして、白いローブの下に白い礼服が見えた。
礼服には、右手に持っている鞘が見えた。鞘に刻まれていた模様はエイレーン王国の国旗の模様だった。

国旗が刻まれている剣は、売りに出されることはない。そして、その剣を持つ資格があるのは、王の家族か、近い親戚。
たとえば、王の兄弟やその兄弟の子だけだ。
そして、これだけの条件をそろえているのは――――――――――

――

「カレルっ…！」

そう、ミリアの従弟、そして行方不明になっていたカレル・エルフェ・エイレーンだけだった。

ミリアはすぐ、行動に出た。腰につけていた宝剣を抜き、野盗の一人の首を切り落とす。

そして、他の者達が驚き行動する前に、魔法を唱える。それは、魔方陣を必要としない『瞬間召喚魔法』。

「【地獄の業火よ　この者を焼き尽くせ】！！」

唱えた瞬間、野盗達の足元から炎の柱が空へと放たれた。それは、地獄の炎の柱。野盗達は逃れることが出来ず、悲鳴をあげながら身を焼こうとする炎から離れようとする。だが、炎は生きているかのように、野盗達の体に巻きつき、的が炭になるまで燃やし尽くす。逃れることの出来ない苦しみを炎は与え続ける。野盗達の姿が、元の人間の姿ではなくただの黒い灰になるまで、時間は掛からなかった。

野盗達が立っていた筈の場所には、炎の柱は消え、まだ湯気を出して燃える黒い灰しか残らなかった。

ミリアは、その光景が終わるまでずっと見ていた。

もう、この光景には見慣れているはずだったのに、目が離せなかった。

モンスターを殺すことには慣れていたが、人を殺したことはなかった。

殺そうと、しなかった。

怖かったから。人を殺すことが。

でも、やってしまった。

「…はは、あはは」

ミリアは乾ききった笑みを浮かべていた。目からは涙が落ちていた。だが、それは雨と混じり分からなくなっていた。ただ、笑っているようにしか見えなかった。

「……ミリア、姉様…？」

カレルは、左腕を右手で庇いながらその場に座っていた。緊張が解けたのだろう。

そして、いきなり知り合いが目の前に現れたことに驚いているのだろう。顔が目を見開いたままだった。その傍らには、白く長い髪を持った女性が同じような顔で立っていた。

「…久しぶりね、カレル…」

「ミリア姉様っ！！」

カレルはうれしそうにミリアを抱きしめた。
カレルは、2年前と変わっていた。身長が高くなり、肩幅も広く、成人男性のようになっていた。でも、まだあの頃のカレルの面影が残っていた。誰からも愛されそうな、優しげなそして、男らしい顔。かわいい私の従弟。

「こんなところで会えるとは思わなかったです」

「…それは、私もよ」

ミリアはカレルに抱きしめられたまま、どこか遠くを見つめていた。それに気づいたのか、カレルはミリアを離しながら困惑した顔になった。

「…姉さま、どうしましたか？」

「なんでもないよ」

ミリアは笑顔を作る。すると、カレルはまた顔を笑顔に染め、ミリアを抱きしめた。
だが、ミリアは何もしなかった。ただ、抱きしめられていた。
だが、それはすぐに終わった。いきなり、バッとカレルから開放されたのだ。そして、

「うぷっ」

やわらかいものが顔に当たった。
それは、温かくてやさしい匂いがした。まるで、母と同じようなやさしさだった。

それは、胸だった。

「カレル、いい加減にしなさい」

その声はミリアの頭上から聞こえた。鈴のように繊細で、綺麗な声。だが、力強さを持っている声だった。ミリアは顔を上にあげ、その女性の顔を見た。

そして、驚愕した。

「えっ……あっ……」

彼女はミリアが好きだった人、カミルにそっくりだったから

再会（後書き）

カミルに似た新キャラ登場！
彼女がこれからの話に大きくかかわっていきます

毎回、話がなんか変で、ごめんなさいｏｒｚ
わたしは、ミリアをヤンデレにしたいのだろうか・・・（＾ω＾；）

思わぬ出来事（前書き）

こっちのお話は久しぶりの更新ｗ
ようやくまとまりました
途中までシリアスで、その後はギャグを目指しましたｗ

思わぬ出来事

「……あの、カレル？」

「何？ミリア姉様」

あれからカレルの傷の治療をするため、運よく見つけた洞窟の中でキャンプをしていた。雨で濡れてしまった衣服やマントを脱いで、ミリアの魔法でつけた火の傍に置いた。ミリアはカレルの傷を魔法で治療した後、持っていた携帯食料を3人で分け合った。だけど、

「…いいかげんに離れて」

治療を終えても、カレルはミリアから離れず、反対にべったりと体を密着していた。（上半身裸で）ミリアは愛用のマントのおかげで中の服は濡れてはいないが、カレルの場合は全身ずぶ濡れだった。さすがに、従弟とはいえ恥ずかしかった。というより、うっとおしかった。

「いいじゃないですか、久しぶりなんですから」

「私がよくないの。それに、聞きたい事が沢山あるんだから」

ミリアはカレルを無理やり剥がすと1mほど間をあけて座った。カレルはそんなミリアの態度にショックを受けている顔だった。

「で、話をする前に、カレル。この方は誰？」

ミリアはカレルと反対に座っているカミルに似た女性の事を訊ねた。

「あぁ…えっと、彼、彼女は……」

「私は、ユエと申します」

カミルに似た女性――ユエの声は、彼と同じように優しい声だった。そして、気品が溢れていた。ミリアは、彼女が貴族の娘なのだろうと感じ、深く礼をする。

「申し遅れました、私はミリア・リズ・レイグラードと申します。カレルの親戚にあたります」

「あなたがカミルの話していた……ミリアさんなのですね。ようやく、お会いできました」

ミリアは彼の名前が出てきて、少し硬直した。何故彼の名前が……。

「彼女は、カミル兄さんの双子の姉なんだよ」

彼に双子の姉なんていたんだ…。だから、似ているのか。

ミリアは少しだけ嬉しかった。そして、悲しかった。

「そうですか……よく、ご無事で……」

彼女は首を横に振って、悲しげな表情を見せた。

「私は、カレルと兵達の助けがなければあそこから逃げる事は出来ませんでした。それに、カミルと貴方のお父様とお母様がいなけれ

ば……」

「……もし、よろしければあの時何が起きたのか、教えてもらえないでしょうか」

ユエは悲しげな顔をしながら、少しずつゆっくりとミリアの大切な人たちが死んだ、あの時のことを話し始めた。

「私は、あの時会議には参加せず自室にいました。お父様から別の用件を頼まれていたので、そちらを数人の兵士とカレルと共に解決しようと、計画を立てていました。ですが、その最中いきなり外が騒がしくなってきたのです。兵士の一人が確認をするために外を見て、沢山の民が武器を持ってこの城に攻め入っている！と言ったのです。私達はすぐに部屋を飛び出し、この事を知らせるため、お父様達が会議をしているという部屋へ入りました。ですが、もうその部屋にはすでに数十人の民達がいました。民達は大臣やお父様、会議に参加していた貴方のお父様達と戦闘をしていました。私達もそれに参戦しました。ですが、数が多すぎました。徐々に私達は追い詰められて、一人また一人と殺されていきました」

「……」

「最後には、私とカレルとカミル、そして貴方のお父様達と数人の兵士しか立っていませんでした。民は、この国の王を倒したぞ！と狼煙をあげ、私達を牢に閉じ込めた後、処刑するつもりでした。……ですが、捕まる直前、貴方のお父様達は命を掛けて、私達を逃してくれました。カミルと兵士も一緒になって逃してくれたのです。私達二人は、王族しか知らない抜け道を通り、王都を抜け出し、身を隠しながら逃げ続けました。時には食料を得るため、村に訪れた事もありました。村の民達は、さいわいにも私達の顔を知らなかったので、ただの冒険者だと見られたようです。色々な情報を教えてくれました。あの反乱は、王都に住んでいた民達だけで行った事。それを援助していたのは、王に逆らっていたある組織だという事も」

「ある組織…？」

「黒のカルナミリアという、魔族の神カルナミリアの名を掲げている者達です」

ミリアはそれに衝撃を受けた。それは魔族全員が崇める神の名前だったから。

魔族達の生みの親、破壊者として知られているカルナミリアは２００年前、女神アルテナと共に深い眠りへとついたと言われている。そして、眠りながらもアルテナと共に世界を見守っていると……。

「何故、カルナミリアの名を掲げているのかは分かりません。ですが、これだけは確かです」

ユエはそういうと、腰にさげていたポーチの中からある物を取り出

した。それは、ミリアが首に着けている赤い宝石のネックレスと同じデザインのネックレスだった。だが、そこについている宝石はミリアの物とは違い、とても青く煌いていた。

「これは、代々エイレーン王国に受け継がれてきたネックレスです。２０００年前、アルテナ神とカルナミリアが契約の証として生み出した、二つのネックレスの内の一つです。それぞれ、人間と魔族の王族によって守られています。今、ミリアさんが身に着けているものが魔族側の物です」

ミリアは自分の身に着けているネックレスを指で触った。昔は、これが綺麗で母に「ほしいから、ちょうだい！」と言って困らせてしまっていたけど、そんな物だったとは…。

「黒のカルナミリアは、このネックレスを手に入れようと何度も私達に刺客を送ってきました。ミリアさんが倒してくださったあの野盗達も、その組織に雇われた者達です」

「何故、組織はこれを手に入れようとしているのですか？」

「理由は分かりません。ですが、刺客達は必ず私達を襲ってくる前にある事を言ってから襲ってきます。それが関係しているのかも…」

「何を言うのですか」

「『カルナミリアが目覚めるために、アルテナは目覚めてはならぬ』

」

「…どういう意味でしょうか？」

二人とも、首を横に振った。

「それは、分かりません。ですが、どうやら黒のカルナミリアは神を、自分達の崇める魔神カルナミリアを目覚めさせようとしているのは事実です。そして、それにはアルテナが邪魔…」

「姉様は知らないと思うけど、このネックレスはそれぞれの神が体の一部を削って作った物らしいんだ。青はアルテナ、赤はカルナミリア。神はこれを作って、眠りに落ちたと言われてる。もしかしたら、これを使って神を目覚めさせようとしているのかも」

「それだったら、私を狙うんじゃ…」

「それは、そのネックレスは亡くなられた貴方のお母様が身に着けられていたものでしょう？」

ミリアは頷いた。

「そして、港の民の包囲を抜け送り届けられた。違いますか」

ミリアは驚いた。何で、逃げ続けていたはずのユエが送り届けられたという事を知っているのか。

「何故、その事を？」

「逃げ続けている私達に、支援などをくれた人たちが教えてくれたのです」

「それは……」

「僕が、2年前ぐらいに連れてった人達だよ。これから、彼らと合流する予定だったんだけど、あと少しって所であいつらに見つかっちゃったんだ」

カレルは乾いた自分の服を身に着けながら、腕の確認をし始めた。ユエもポーチにネックレスを戻し、身支度を始めた。

「彼らと合流して、姉様にこの事を伝えようとしてたんだけど、好都合だったね。…あれ、そういえば何でミリア姉様はこっちに来てたの？」

「契約をして、成人の儀を行うためよ。その相手を探しに来て、ケイトとネリネと一緒に来たんだけど……」

そう言ってミリアは思い出した。そういえば、二人と自分からはぐれたのだ。もしかしたら、もう二人は町に入ってしまったかも知れない。

「あぁ、どうしよう…早く二人と合流しないと…」

そういいながら、ミリアも自分のマントを羽織り、先に外へ飛び出した。もう、雨は小降りになってきたが、マントのフードを深く被る。そして、瞳を閉じ、足元に黒い魔方陣を展開する。

「【絆の糸、今、我の瞳の中に】」

すると、頭の中で遠い町の様子が見えた。門はまだ閉じてはいない。それを確認すると、ミリアは二人の魔力の気配を辿っていく。なかなか二人の姿が見えないため、もっとマナを込める。すると

「……いた」

二人の姿をようやく見つけた。二人はまだ森の中にいた。街道から離れ、全速力で何かから逃げているようだった。二人を追いかけている物を見ると、モンスターの中でも下の下で、群れを成して獲物を狙う《ウルフ》と言われる狼たちだった。冒険者になりたての人の、最初の試練によく選ばれるモンスターだった。だけど、彼らは熟練冒険者。まして、ミリアと剣の腕だけは互角な彼らにとって、群れを成していてもとても弱いはず。何故あんなに必死になって逃げているのだろう。

「……ん？……」

ミリアはふとウルフの群れの中に、別の物が混じっている事に気づいた。そして、その姿を確認すると、すぐに魔方陣を消し、目を開け走り出した。いきなり走り出したミリアに、カレルとユエも遅れてついて行く。

「どうしたの、ミリア姉様！いきなり走り出して」

後ろからカレルの声が聞こえたが、ミリアは返事をせず、走り続ける。

まずい物を見てしまったから。アイツは二人では勝てない。

「間に合って…っ！」

ミリアはただ、二人の無事を祈りながら、夜の森の中を走り続けた。

そして、見つけた。

ミリアのいる崖の下で、ウルフとアイツと睨み合っている二人の姿を。ミリアは躊躇わず、宝剣を抜いて、数mある崖をアイツ目掛けて飛び降りた。そして、

「…こんな時に、出てくるなぁ！！この、変態！！」

剣にマナを込め、勢い良くウルフの中心にいたアイツの頭を強打した。ミリアは強打した後、すぐに足払いをし相手をこけさせ、頭を踏みつけた。メリッと地面に頭が沈む。

「…はぁ…」

ミリアは踏み潰した体勢のまま、周りの状況を確認する。ウルフ達はいきなり現れたミリアの存在と、踏みつけられている主に「えっ、どうなってんの。これ」というような顔をしている。追い詰められていた二人も同じような顔でポカーンと口を開けていた。

ミリアは二人に軽く手を振った後、ウルフ達に「毎回、なんかごめんね」と言って、カバンの中から、持っていた干し肉を全て投げた。ウルフ達は「もう慣れたよ」と言った顔でミリアを見た後、嬉しそうに干し肉を食べ始めた。

「…どんな状況？」

遅れて飛び降りてそう言ったカレルとユエに「いつもの事だから、気にしないで」とだけ言って、二人の所へ歩いていく。

「…大丈夫だっ「ミリア！今までどこに！」

そう言ってネリネはいきなり抱きついてきた。ミリアはそれに驚いて、思わず後ろに倒れかけたが、なんとか耐えた。

「心配したんですよ?！いつの間にかいなくなってて、探しても探してもいないと思っていたときに、あのウルフ達に襲われて。もしかしたらミリアも同じように襲われたのかと…」

ものすごく涙声のネリネの背中を撫でながら、ミリアは苦笑した。

「…それはありえないから、ウルフに負けるほど私は弱くないよ。それに、アレ知り合いだしね」

「…知り合い?」

ミリアは驚いて涙を引っ込めたネリネをケイトに渡し、二人に襲い掛かった張本人の所へ向かった。いまだに、頭が地面に埋まったままだった。ミリアはため息をついて、

「…いい加減に起きないと、魔法で丸焼きにするわよ?」

わざと、怖い声で言った。ほぼ本気で。

周りのウルフ達が勢い良く後ろに下がった音が聞こえた。

「…丸焼きは勘弁してほしいな～」

ゆっくりと起き上がった彼は、頭を掻きながら服に付いた土やほこりなどを落とし、視線をミリアに向けた。紅茶の色の髪に金色の目、動きやすい服装。頭には犬のような耳、髪の色と同じ色のふさふさとした尻尾。ミリアにとっては、嫌な知り合い。

「何でこっちに来ているのか、じっくりと教えていただきましょうか？人狼、エルボス・イェリア・ウェルザイアさん？」

魔族の中で有名な種族、《人狼》の名家の息子、エルボス・イェリア・ウェルザイア。
モンスターとの戦闘では、驚異的な殲滅力と高い運動能力を持ち、ウルフ達を従える人狼。
その頂点に匹敵するほどの力をもつ、ウェルザイア家。
その現当主の一人息子。戦闘では、逃げるモンスターも残虐に殺す彼。

だが、普段は「ミリア命」で皆を困らせる行動を取る。
例えば、いきなりミリアの部屋に大量の服と花を送ってきたり、ある戦闘では「ミリア、愛してる！」と大声で叫びながら、モンスターを蹴散らしていったり、ある時はミリアの寝室にいつの間にか入り込んでたり。
ミリアにとって、迷惑極まりない人物だ。

「そりゃあ、ミリアがここに行くって聞いたから…」

ミリアは彼が全て言い終える前に、綺麗な回し蹴りを入れる。
その光景に、思わずウルフや他の４人達は拍手をした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1284r/

白と黒のワルツ

2011年10月8日19時12分発行